



特  
へ13  
3150  
2

昔話 稲妻表紙卷之二

江戸 山東京傳

瀟堂記

五 厄神の報恩

扱も佐く良三八郎へ妻子と具して丹波の國おつる。大江山の麓穴  
左の里あかれ住ける。少くのたぐも。町の費ふつひを。別ありつひの  
便もあけれ。みぐる山畑をたか申。仕別ぬ業の辛苦。たへ妻磯菜へ  
當國の名産ある。蘭筵と編市。小ひささて。つぐの價を。夫婦とも  
かせぎゆして。あ人の児を。月權月日をおらぬ。あつる小三八郎  
おのゝ。忠義の。みいひ。あが。罪なき藤波を殺せし。ゆ。え。そ。く。を  
不便なり。後小つ。若殿御勘當をうけ。き。佛行方なく。あつる。は  
我心づ。も。藤波が。非業の死も。水の。泡。い。ふ。き。ゆ。あ。り。せ。ら。る。彼

古今草子

冥福を得る種もと農業の片手ぬも。念珠とてふささる。たえと  
念仏とてあけられ。里人異名とつめて。六字南無右あつとよびけるを  
みぐるも世とあふふよき名なりとあひて。つひふ冥名と志たりけり  
さて又後くまへ。藤波を殺したる。夜金剛の筆百蟹の圖の絵巻物  
紛失し。長谷部の雲六と計る。盗取たりと沙汰ありつは。盗人の  
立田の山小入て。押あぐら。の穢たる名と得ること。宣耻さんや滑るれ  
とも盗泉の水と飲を熱をれども。悪木の陰小息をとてまりのと。  
つあもしてかの巻物とたづみ出。汚名をそがぶとておのひ。一ツあ  
奸臣不破道犬が悪意を見あらし。てお家の禍の根をたら。波は  
縁者小出舎。て恨のぬふか。死後の名と清く。とてありひさごめ。  
折く面とかく。て大和の國小つ。或へ京都小つ。て便宜とら。ひぬ

かくてある日。大和より京小赴。木津川の渡船小あけ。小船中。ふ合の  
うら小一人の老女あり。紅裏の昔模様のおびたる小袖。小松は菱の紋つけ  
たると着し。さやうなる色と三輪とみる。腰あつけ。細き竹枝小をりたるが  
頭。佐野の白宇と乱れる。舟うら枯木のやう。小癒がれた。人品  
さあで賤し。を紫の小袖着たる。女の船中。小あを。清くのみ。ささる。あ  
さみふく。袖をおりて。おあひく。片を。ふひを。まり。片さう。を。あ。船中の  
岸あつ。南無右あ。の衆人。も。岸小の。り。の老女。後小。あ。前小  
と。み。行ける。ふ。時。紅日。西小。落る。天色。已小。晩。あんと。を。あ。右。の  
草鞋のひもと。む。を。び。ひ。ぬ。小。の。老。女。の。庭。小。行。廻。たる。が。樹。木。を。あ。ひ。か。り。て  
やの暗き所と。なる。時。四五疋の犬。出来り。て。と。ま。ま。頻。小。あ。く。や。と。く  
ら。ひ。は。ん。と。も。老。女。杖。を。ゆ。げ。く。打。も。を。も。あ。わ。も。あ。ら。う。ん。形。替。あり。



六字南無右衛門  
 木津川の渡し  
 老女の危難を

名古屋巻之二

かる難義と見え。てふむ右糸の走りつと。大もと打ちして。老女と見え。
ゆるかそれたる小や地小たれ伏て息もたげられ。介抱し。くさぬぐ
と。りけるふ。や正氣ふあり。どくのおん方と。あさるれども。かる難義と救ひ
むるか。でけあさ。よは。沙恩か。ま。こ。報。え。ん。と。あ。く。礼。と。の。が。れ。ば。南。無。
右糸の打す。さ。さ。り。厚。き。詞。と。あ。さ。む。ふ。あ。あ。く。そのものふ。京。の
町。ま。や。送。り。行。生。あ。さ。さ。と。と。と。相。伴。ひ。三。条。の。四。つ。は。わ。く。東。西。小。別。去。ぬ。
さ。南。無。右。糸。の。一。月。ど。う。京。都。ふ。と。ま。り。百。蟹。の。巻。物。と。あ。ぬ。け。ら。ら。
その留主の万一子栗太郎は。時年八才あり。が。疱瘡と。や。母。磯。菜。が。
辛。勞。お。か。さ。あ。く。も。胞。瘡。の。神。の。棚。を。ま。う。け。赤。幣。束。挾。張。子。の。達。
磨。木。兔。と。ら。起。卧。小。心。と。つ。け。茜。の。頭。巾。と。針。と。と。忌。て。隣。家。の
手。と。り。紅。火。燭。の。朱。と。う。と。ふ。紫。糸。の。色。に。更。あ。り。詞。の。禁。忌。火。の。の。り。あ。く。

食物のさし合。ま。ま。と。う。づ。ふ。心。を。り。ひ。湯。尾。岬。の。孫。杓。子。鮮。茶。の。呪。
か。ど。ふ。た。と。り。こ。ん。皆。仕。法。し。て。者。病。け。ら。と。あ。り。に。胞。瘡。と。熱。氣。
つ。く。目。と。ひ。さ。つ。け。今。も。た。え。つ。と。と。あ。り。こ。と。あ。く。あ。く。出。痘。
小。う。う。回。上。總。身。と。ま。あ。も。か。く。發。瘡。し。け。ま。が。く。て。今。も。危。し。
時。も。折。も。折。も。折。も。夫。の。留。主。あ。る。を。便。か。き。と。い。つ。ふ。せん。と。當。惑。し。
け。あ。や。あ。そ。や。し。飯。り。と。待。佐。娘。楓。を。日。小。り。な。り。村。家。つ。う。て。う。か。ん
と。れ。と。飯。か。げ。な。ふ。又。く。と。う。つ。益。愁。ぬ。胞。瘡。神。の。機。嫌。わ。し。と。あ。や。
栗。太。郎。足。を。う。と。て。あ。さ。さ。け。び。小。豆。枕。と。あ。け。う。ら。人。形。の。腕。ひ。さ。ぬ。と。
な。ご。と。め。れ。出。し。さ。あ。ぐ。小。う。う。く。あ。あ。と。と。泣。止。を。殆。り。て。あ。多。し。た。る
折。し。も。ふ。む。右。糸。の。一。月。が。う。あ。く。家。小。う。る。磯。菜。表。ひ。出。む。ひ。て。ま。ら。栗
太。郎。が。ま。ま。を。語。ら。あ。も。あ。む。右。糸。の。氣。づ。ふ。ひ。つ。そ。ぐ。く。中。が。れ。屏。風。を





なむ右衛門



ふひる  
南無右衛門  
一子栗太市  
疱瘡を  
やむ

五

栗太郎がのき。平愈して我ぶるもあし。再又一つに災をいさふける。  
 磯菜の夜灯とたて鏡小ひひて髪とさうあげつる。鏡のうら小  
 友波が顔ありくとうりて。おそろしきさあかれ。あふやとひく背後を  
 くり見れば。毬のどき心火窓とこへて飛う家のむののわりあて。がりと  
 笑ふ色と。磯菜いたぬらとどのけさふたのれ。其に絶入ぬ南無  
 右弟つめてあそめ抱き起して。醒薬をふへけふを。やうくいきうり  
 けふ。これより心柔目ぐ小うりて。ののともまきを色あてぶらて瘦おろへ。  
 日小異小ありそ。やうも又えと。ふむ右弟つまぐり。ま  
 中も。良薬をのろくふらととどと。とく友波がひれる顔目さ小  
 へ。其まぐ小り。と苦く。やう。命もあやうく見ぬ。時娘  
 楓ハ十二才。栗太郎ハ八才あれども。兄弟とも小年小奴と。とれ

か。とき生まゆ。殊更世間ふまれある孝子あれ。母の病を  
 かく悲も。兄弟枕方あふふつきをひて。忘るも病床をもうれを。  
 うらぐりみささうあ。心を尽して。看病ける。病人あり  
 うら。一日とあひとせざれば。烟を立ぬる身なれば。せんさう。あむ  
 右弟つ病人を兄弟の子とも小あづけおき。其身いたがや。ふ  
 出。うらふ日雇りのあひと得て。其日かゆる心れ。苦く。つらあり  
 ろん量想へ。夜せられが。あむ右弟の家ありて。看病をれば。  
 兄弟の子とも。等け。い。仏神の力だ。たの。奉るより外。さ。いひ  
 あつせ。あ。手と。あひ。毎夜完太の。観音ふ。ま。つ。て。  
 南無大悲観音菩薩我。一命とさうあひ。何を母の病苦を  
 救むと祈念。三七日。間まうでける。ふ。も。孝子の誠心を



感かんと云ひける。不ふや満願まんげんの夜よより。母ははの病やまひ中ちゆうややおこさる。一月ひとつきをかりの  
うち小全せんとん快くわいし。氣力きりきをうけて前まへよりもおか盛さかふる。誠まこと是こゝろ孝行かうかうの  
功徳こうとく大おほなる由よしありし

○孝子の物語のけいで不記ふきして。世の童子どうしふちちとことあり明心めいしん  
宝鑑ほうかんといふ書しよよ。我親わがぢやは孝行かうかうなれば。子も又我わがは孝行かうかうをなすと  
りのかゝる。おのれ既すでは不孝ふかうなれば。子も又おんを孝行かうかうするん。これ  
孝順かうじゆんなれば。又孝順かうじゆんの子と持もちあり。いふ又疑ぎしく思おもはる。聲こゑ磨まり  
滴たみくと落おちる雨あまとろくと見みえよ。とろくと落おちるつねとたゞとろく。されば  
我父母わがふぼの老後らうごを安穩あんゑんなすしめ。我わがも又老後らうご安穩あんゑんなるを疑ぎす  
○又世せいの軌きといふ書しよよ。おとせ人の子ことて。身みと抱かかりて。まてとて。しも  
父母ふぼの心こゝろをむくも。孝道かうどうとつくとまてあり。父母ふぼ身みまうてのらも。

其その靈たま小對こたいして。存生ぞんじやうふつひおれし。ことそむくをわくも。  
いつかど孝道かうどうとつくとまて。おのれが幼少ちゆうせうの時とき。父母ふぼの愛あい念ねん  
撫育ふいくの恩おんと報むかへることあり。世間せけんの孝道かうどうとつくとまて  
あていざる。他人たにんの小兒せうじと育そだて。その情愛じやうあいの厚あつきを  
見て。父母ふぼの苦勞くらうと思おもひ。自悟じごるべし。古ふるより孝かうとまて  
て天てんのめぐみぬらう。あつひ立身たてみ出世しゆせして高禄かうろくの人ひとなる。  
或ある運うんとひら千金せんぎんと得え富貴ふききの身みとある。例たとひわけてあつひ  
づくと。又また不孝ふかうふして天てんの四討しやうたうとまて。病苦びやうく貧苦ひんくと受け。悪あく  
獸毒あまふく害がい害がいせし。雷らいふらふれおとて。非命ひめいふれ。例たとひも  
又またかかつて。されば知しらね。孝道かうどうの人倫にんりん第一だいいちの道みちあて  
決定けつぢやうの役儀やくぎといふ道理だうりとよく。つとまて。少すくも父母ふぼの

おふやとてむいど。朝夕茶敬おとむ。一生安穩るじむらふ  
心ぐくまを又ぞし

六 因果の小蛇

かくて後ら南無右弟つが家内。無事小打さける。一日ふむ右弟つ  
たが中ふむけふ草むらの裏より丈三尺もりの蛇りて墓をらへ  
かぎくのまんごどむむ右弟つとれと見て墓をたどけまわしく。うらふ  
蛇よ汝我るよその墓とゆるせじ。さあむ我娘と汝ふあふべとをいひ  
けるふ。蛇いよとむ入る体あて。墓と汝さじめ。ぬの草はさす所かれ  
入ぬさて農業とりて家ふ飯ける。小其日の夜半の比娘楓俄り發  
熱して若く。毒たくくまきけむ。両親おとらきて目とまぬ。いつて  
ぐんぐん抱起くと足れ。佐哉小蛇。楓が腹小まきつこと。かぬ首とたぐ。

舌と吐てらるる。ぬ。おそろ。ふともおろる。あり。磯菜とれと見て身の毛  
いまだら泣色小なりてあく取捨中てよといふ。かむ右弟つとむ我直かと  
蛇墓と吞を見てたをけぬ。若墓を放中へ我娘とよふべしと  
いひける。比蛇代戲を突くと来まる小疑か。戯言いさるまきとあり。  
凡蛇の娘心うさりのとす。眼前小かる奇怪をえる不思議まよと。  
いひけく蛇をひきとる。驚のらふ入。携去大に山の谷底小捨く  
このけり小其つぐら夜。あむひ楓發熱くと苦く。いつの間あむま蛇  
来りて。腹小巻つて変前のごと。さむ右弟つ益怪。いづい殺くむらべ  
と思ひ蛇の首小繩のり。首を碎うがれが生る。のめと煮てまきれぬ。あ  
蛇とさうをふら。平らる石の上小おき。谷の脊とらる首と微塵よ  
打さまける。血く不さと飛散て。傍小居る栗太郎が。面上一

かゝとひく。呀とさけびく倒まころ。ふむ右糸の蛇を捨て抱き起せん  
栗太郎が両眼小蛇の血をこぼりたる様子あり。痛堪ぐくく  
おろきさけびぬ。穢菜もいとぎまらひて介抱さる小。志をくありこ  
かりく泣止けるが両眼ひくく支わさる。見ろく。暇たるとれありぬ。  
かむ右糸の死したる蛇を携へさき遠所捨て去りけるがいまご  
くくがらした小蛇又来て巻つてその如く。かむ右糸の糸といつら  
はまへ焼殺さるや。火中小投下けるが。あつて火中と飛出まこ  
巻つきぬ。くくくく。取捨んとせしむ。蛇の執念いと強じて。志をも  
もろれを後しせん。くく。其俵小あり。おさける。唯腹ふ巻つきたる  
のこめて。別小害とくく。楓もくく。おのく。我身まらぬ。くく  
ありひける。後くく。蛇小別志とみて。前生の因果とあはる。くく。けりて

愛念深くあり。朝夕我食物をわらふへ養ひけり。蛇もくく。水で食事  
の時小く。れは懐より首と出せり。くく。お栗太郎の蛇血の  
毒氣両眼小入て眼疾とあり。くく。瘰癧とくく。くく。つ小  
生れもつぬ。盲目とをる。小ける。穢菜左小楓をくく。右小栗太郎  
くく。二人をくく。顧つてくく。便る。子もく。形勢や。懐の神仏や  
楓の世小たる。姿養。穢菜小生れつき。たひ。女御更衣小たる。くも  
くく。かぬ容儀。小妖蛇小見とあれて。人の交り。く。ぬ身とあり  
栗太郎の生つき。もき。く。小心。く。も。く。て。か。く。あり。く。おひも  
く。く。盲目。く。く。く。く。殊更。兄弟。く。も。小孝。く。く。の。く。に。  
く。く。かく。薄命。く。く。あり。け。く。や。く。く。宿世の因果。く。く。かく。災の  
く。く。く。く。く。て。悲歎の涙。く。く。く。く。兄弟の子。く。く。く。く。く。



山崎の蛇



藤波が怨魂  
 小蛇こわく  
 南無右衛門  
 楓の腹よ  
 ままひつ

谷田屋巻

左右よりうつきて。北月を極さより。其小涙をおこし。ほろ介抱さる小いさぎ  
悲し。さほらうけり。かむ右来つ目を。あいたき。我つら。くあり。小波が  
怨念。予ども。等と。あやまし。我等。夫婦。小おのひと。させて。宿恨を  
報る。小うまひ。か。かれ。一點の。罪。あ。く。あ。て。殺。した。れ。涙。く。恨。も。理。か。を  
三代。相。恩。の。主。君。の。た。ら。ふ。せ。し。こ。う。ま。ま。ば。た。ひ。子。ども。等。と。さ。う。殺。さ。す  
とも。悔。ま。小。わ。る。と。磯。菜。歎。ふ。我。も。少。し。も。悲。し。か。と。歎。ふ。胸。よ  
お。し。から。し。て。い。づ。れ。兄。弟。の。子。ども。等。の。口。を。そ。う。へ。父。う。へ。の。さ。る。ふ。う。う。う。  
忠。義。の。る。小。あ。ら。ぬ。ひ。其。報。と。ま。け。ん。た。ひ。我。く。が。身。の。い。ま。の。憂。目  
と。見。る。とも。涙。を。も。も。い。づ。れ。わ。る。と。母。人。よ。涙。く。あ。げ。きた。ま。ひ。く。又。も  
病。を。ひ。き。い。づ。れ。む。ら。か。と。年。小。飲。合。ぬ。理。發。乃。詞。孝。心。ふ。う。き  
け。か。げ。きた。大。丈。夫。の。か。む。右。来。つ。も。胸。ひ。し。と。お。し。あ。さ。う。お。が。を。と。ら。し

涙を奉とめて。おしぬぐひ。歎を見せぬ。武士形。象の心。乃。う。ら。あり。ひ  
中。れて。か。不。衰。あり。か。て。又。あ。ら。う。く。月。日。と。あ。ら。う。け。ら。栗。太。郎。亡。目  
の。こ。と。あ。れ。が。一。生。を。こ。と。世。の。り。の。種。ふ。ん。琵琶。を。子。も。せ。琵琶。法。師  
と。あ。ら。ぶ。の。ら。う。く。高。官。も。と。と。み。貴。人。の。と。が。近。く。め。さ。う。と。事。も  
あ。ら。ま。ま。き。小。わ。る。と。せ。ま。て。い。生。涯。安。穩。の。計。を。あ。し。つ。ら。と。と。あ。い  
つ。ま。頭。を。剃。も。く。名。を。丈。弥。く。久。磯。菜。を。つ。け。く。京。小。の。が。其。比。音。曲  
と。あ。ら。名。高。く。ま。へ。い。沢。角。檢。校。の。り。ふ。は。て。は。ぬ。り。ま。く。母。子。と。も。小。奉。公  
さ。や。專。琵琶。と。さ。ふ。せ。け。り

七 呪咀の毒鼠

扱も大和の國。佐木。の。館。小。お。ま。と。判。官。負。國。子。息。桂。之。助。を  
勘。當。し。て。後。銀。杏。の。前。月。若。母。子。と。平。群。の。下。館。小。移。せ。名。古。屋

三郎左衛門同山三郎父子と守役とて付おられぬ扱桂之助の繼母  
 手の方といひ志毒悪くして。さて桂之助夫婦をふくそ、いろふもきて  
 桂之助を失ひ實子花形丸と家督小せぬかと思ひ居けるが思ひ  
 桂之助勘當の身とありこれ心中ひそ小喜ひり又月若家督小せん  
 こともやと持へば何とぞこれ等母子を失ふをたぐぬ。あつこいども  
 此等少忠臣名古屋父子つきと居る。片時も心をゆるさぬ。いろふも  
 せんさく打過けるが不破道犬奸智あけまば、蜘蛛の方乃心底  
 悪意あつて見ぬき。これ我大望をどくもよら便ひりと毎ひ一時  
 手の方小近づき。好意深き体小つひあつて探りころえふ。果して月  
 若母子と失ひ花形丸を家督小しなき望とあれ道犬とあつて  
 何事も果小まらせむべし。なほそつひまのせんとけりあつて蜘蛛乃

かのめあつて長びぬかて道犬蜘蛛の方と密談し。先月若と呪咀  
 とまふたさあ。其比よく呪咀の法を子傳る。頼豪院とよ修験者と  
 ひそふまひき。射物とおやあへつたのけふ。貪欲深きゆのれは速  
 ふうけひ。密室小とらりて修法小をせける。さふ平群の下  
 館小へ银杏前月若母子あ人移住名古屋父子これと守護とて  
 ありける。月若のこゝに小土才あをせける。あつふ月若偶病をせりて  
 打臥。寢食安くも。次第小瘦かると良医をえつて盡薬をせりて  
 といふも。更小あつて。だめく眠る。これおびゆるとなつてなり  
 珠更怪むべき深夜小いれ。看病の男女おびゆを祈りを生じ。  
 鼠おびゆく病床を飛りぐる。後あつて昼も中く人をもおそれる。いろふ  
 充滿。月若の髪乃毛をくひ。肉をもくひ中。頭小毒瘡を發し

痛堪ぢ。心を来日をおひておとくけり。母銀木の前歎悲しくおとけり。かゝる神社仏閣小立願。名僧知識の加持祈祷と云々の人ども。妖鼠をちちと益怪きものおとけり。名古屋父子の昼夜病床をみるに。看病けるが。三郎左衛門山三郎小むひていひけり。我曾て酉陽雜組を見よ。人夜目小ゆまありして。鬘を失ふ者鼠の妖あり。又鼠人母ひ牛馬お着て。夜夜避をいんともとる。かゝる若君の御客体とうか。不彼書小記と云々の尋常の妖鼠と母か。かゝるをいふ。呪咀する者ありて。障礙をかたとおとけり。かゝる汝公をつけ。怪異の出所を見わすべし。いひければ。山三郎某も尤もと思ひひぬれ。と。ぬり別して心をぬらひ。寝殿の四方小眼をらりて守護しけり。さて一夜丑三つころ。銀木の前をらりて。

御手医者。乳母侍女等もおとくをねりて。生どたる不思議や。犬拔群の大鼠行廊の方より来り。形常の鼠をらりて。と。ども其おとにさ。犬のどく。と。形勢なり。あかあや。やと。山三郎。刀を推へ。けり。つえつ。瞬もせず。見わする。不の鼠。い。ぬら。若君の病床近。飛来。山三郎のどく。立上り。刀を拔。まら。けり。丁。切。小。妖。鼠。を。身。と。お。と。て。劍。を。避。け。障。子。を。踏。か。り。て。庭。上。小。走。り。出。築。牆。を。く。不。飛。の。び。山。三。郎。追。う。け。り。手。を。小。柄。を。抜。り。て。と。ら。り。と。打。つ。鼠。の。額。小。ぞ。と。たら。鮮。血。た。り。と。流。れ。り。と。忽。一。道。の。烟。を。た。妖。鼠。立。の。び。頼。豪。院。か。姿。髪。髻。を。か。り。ぬ。り。山。三。郎。と。と。と。恠。曲。者。と。思。ひ。け。り。お。と。け。り。頼。額。二。と。斬。つ。る。頼。豪。院。閃。と。身。を。躡。平。形。金。珠。を。お。と。り。ぬ。り。







安部乃晴明が金鳥玉兔の神書と家傳し。ト筮小妙を得る  
 のふいへ。かれとめしてうらふり也。おんすあれし。幸唯今某宅小集り  
 居いしやを。貞國これとす。そのしつぞぞくわし。よとあふせり。道大  
 か。こゝひて。ちて私宅小ひつ。い。頼豪院ハ額乃疵。中  
 中癒再道犬が奸計ふく。召小應。トて。貞國乃目をり。に  
 まろつてぬ。身乃夫た。く眼中光。斬髪。れ。ら。の。鬼中  
 篠懸小紅紗の衣と着し。最多角の念珠を袖らみ。小持中。啟  
 乃扇を把。あ。うもま。む。ぬ。金張付乃廣坐敷。に。ゆ。を。お。く。せ。ど  
 坐。一。たる。体。誠。小。つ。み。れ。悪魔。とも。降伏。と。き。骨柄。なる。貞國。ま。が  
 初見の挨拶。あ。る。奥方乃病体。を。告。て。ト。筮。を。と。ま。け。小頼豪院  
 恭。く。卦。と。敷。下。し。孝。と。施。し。て。い。し。奥方乃御病氣。全。く。呪。咀。を。ら

者。あ。り。て。若。し。あ。や。と。不。疑。か。し。今。四。五。日。と。過。る。べ。御。命。危。る。を。し。  
 若。疑。し。く。お。が。し。玉。り。御。寢。所。の。庭。中。良。の。隅。乃。土。中。三。尺。を。り。し。せ  
 見た。ま。り。て。分。明。あ。べ。し。と。ら。貞。國。羊。信。羊。疑。を。う。近。仕。乃。士。小。命。ト  
 玉。へ。近。仕。乃。士。か。し。と。ふ。し。ら。土。中。と。り。し。む。小。果。し。て。一。合。乃。白。木。乃  
 箱。と。得。く。推。へ。来。り。貞。國。小。た。て。ま。る。貞。國。これ。と。ひ。き。入。る。小。内。に  
 大小。二。つ。の。藁。人。形。あ。り。て。と。き。る。も。あ。く。釘。と。打。た。り。貞。國。大。に。發。る。  
 頼。豪。院。が。詞。を。奇。な。り。と。し。これ。呪。咀。に。う。さ。ひ。か。け。ま。さ。ど。別。小。一。物。も  
 かけ。ま。さ。何。人。乃。所。る。あ。る。や。分。別。を。さ。し。と。い。れ。け。る。小。頼。豪。院。膝。を  
 と。め。凡。呪。咀。の。法。ゆ。へ。願。書。か。く。て。へ。あ。ひ。さ。し。其。箱。を。小。い。ひ。し。と  
 箱。を。取。わ。げ。つ。く。見。て。中。て。扇。乃。尻。と。り。し。箱。乃。底。を。つ。き。ぬ。き  
 ける。小。か。さ。み。底。あ。り。て。其。う。ら。し。う。一。通。乃。願。書。出。さ。る。貞。國。こ。ま。こ。ま。を



名古屋山三郎  
 若君の寝殿  
 宿侍一妖鼠  
 年裏剣を打  
 俄小暴風起  
 寝殿  
 鳴動を

山三

山三

ころひらき見れば蜘蛛の手が花形丸。兩人を呪咀するの願文にて。銀杏の前月若兩人願主の名あり。ちも浪書の前乃自筆をもちくかきたる。いさむもあつと。貞國忽怒。氣心頭小あつ。面色変トて。あつとめのもいさむけ。先頼豪院。呪咀をもちひのそく。修法をねけり。蜘蛛の手の方の病床小壇をたがりて。災禳乃法を修し。か乃薫人形。釘をぬき。護麻手乃火中。小投とて。焼をせり。かくて蜘蛛の方。かりく。快氣乃体をか。貞國小ひひて。いひけり。妾をかくて。銀杏前。母子を實乃娘。實は孫といふ。何ぞ桂之助の勘當をゆるし。たまつ。ささむ。月若と家督。小したまふ。かうに。その。宿願ある。小。か。ら。ら。り。て。妾。と。繼。母。と。い。ま。さ。む。若。花。形。丸。家。督。小。る。ん。と。も。や。と。さ。た。り。て。妾。親。子。を。呪。咀。殺。ん。と。い。計。い。か。え。養。齋。齋。と。心。い。

鬼よりもか不おそろし。い。い。秘。つ。の。妾。親。子。小。を。や。い。と。た。ぬ。り。尼。法。師。と。も。か。し。ま。れ。し。我。く。か。て。あ。ん。つ。い。あ。か。ら。ら。生。業。小。と。殺。さ。れ。ゆ。つ。あ。お。そ。さ。さ。う。妾。親。子。と。忌。ま。ふ。と。情。か。き。銀。杏。前。や。と。い。て。涙。を。滝。ろ。と。流。し。ぬ。け。時。花。形。丸。一。年。已。に。十。六。才。い。ま。さ。る。前。あ。く。あ。り。け。る。母。乃。悪。性。少。く。露。を。も。似。と。志。正。し。き。生。ま。る。素。母。の。非。沙。王。と。と。く。ど。い。日。の。子。細。を。す。て。大。小。歎。息。し。か。る。凶。事。乃。い。せ。る。こと。皆。こ。れ。某。が。誤。り。檀。弓。篇。小。昆。弟。の。子。ハ。猶。己。子。乃。と。い。と。つ。某。月。若。小。對。し。て。鄧。伯。道。が。た。志。の。れ。け。ら。う。と。海。悲。し。け。り。判。官。貞。國。蜘蛛。手。乃。方。乃。恨。乃。詞。花。形。丸。が。理。お。り。き。詞。を。す。て。浪。書。前。月。子。を。三。益。ふ。く。と。親。と。呪。咀。する。大。罪。人。片。時。も。た。け。ぬ。と。し。と。黒。星。眼。平。と。つ。あ。り。の。と。め。と。出。し。銀。杏。は。前。月。若。兩。人。乃。首。打。く。素。と。



頼豪院

修験者頼豪院不破道犬よこのまれ

妖術を施し毒鼠を化し

月若く殺んと近づき

名古屋

山三郎が  
半裏剣

額に打きて真の姿をあらわし  
修法破

命とけいれぬ。蝦手乃方道犬と頼見合ふ。志を奪ひたりとありひかす。これを  
とらひしれども。貞國は入ると花形丸の珠更小詞をけしてさむきと  
火性短氣の貞國少しも宿免あうけいれ。乃ち道犬一味の黒屋  
眼平。迷惑教く其坐を退き。君命とくとも。母子乃首うんと  
いも。名古屋父子。たやまの渡をまじ。ある時。かれ等とも小打ん  
とありひかす。四五十人の荒男等を引具して。平群の館へついでゆく。  
嗚呼銀杏前親子の身乃う。危あけり。次第なる。此言をきく  
下館小まへけいれ。名古屋父子大に驚き。三郎九衛門山三郎小  
ひひこ正しく不破道犬が奸計。少く姫君小ぬれ衣とおそ。御母  
子以失んともりし不疑なり。打手乃むらぬ。され某急を上館小つら  
一命小うても。かへひきまて。御命と救まのせんとて。いそぎく礼服を

悪く揚子小馬をひめてひらりと打乗供人のそらふひぬもおそしと  
心せぬ鹿藏とらふ下部不提灯のせ。走走んとあそふ。三郎九条門が刀  
鞘をひらき山三郎を乗せし。雪づふさうきほ。親人御如在のあ  
まきま。道犬ハ奸智あき者あはれがまを彼が計小おら。とも小  
涙を得ぬふか一言の詞も心をつけくのまをさつへ。三郎左衛門お  
うらまき。それ合點あり。あまきと氣づふまをれか。内乱のうら  
御側近き者等も油ひる。唯御二方をよく守護とて。かげんや  
捨て一鞭めて。飛ぶとく小走りゆ。山三郎身をそづて。かげんや  
まで見おろけり。折しも袖をひたる夕鳥いと悲しげ小鳴をま。か鳥  
あはれのあきま。御二方乃御身乃ころ。親人の身乃ころ。つぎふも  
われをあきま。つと吐息して胸をさむるをうら。これと一世別

と。後小を思ひあきま。まふ又不破伴左衛門重勝の先女君令  
とらひら。名古屋山三郎小草履をりら。面を打きと。ふら  
遺恨小思ひ。笹野蟹藏。藻屑三平。土子泥助。犬上雁八。等四人乃  
者とあきま。一夜。平群の館乃近辺と徘徊して。山三郎とつけゆひ  
けり。一夜も。いね小思ひ。来りて。あひぬ。夜ハ宵闇と。空かきらりて  
星も。見へど。あやも。つらぬ。暗夜。ありけり。三郎左衛門。麻呂小提灯  
持也。馬と飛せ。急ぎ来り。伴左衛門等五人乃者。三本傘乃  
紋つき。提灯をりて。山三郎。ふら。あき。思ひ。物蔭より。一団小  
押が。出ま。提灯をり。と。ま。落る。麻呂。飛せ。一腰。又。手  
かけて。何者。あや。と。さ。三郎。九条門。馬を。と。こ。ハ。辻。斬。乃  
曲者。盗賊の。所。る。か。い。ひ。け。肩。衣。を。の。け。刀。は。抜。き。馬。より

飛とびまるひなもあわせど。伴た左さ衛ゑ門もんが斬きつる。白あ及まの縮妻ま目め前まへに閃  
 光ひ功こう頓とん智ちの三郎ら丸まる衛ゑ門もん馬うまのかげ小身みと避るあせ。伴丸まる衛ゑ門もん  
 刀やづくふ鐘小こ々々ときらつもて火ひ花はなをらと飛散ちた。晴夜やとつい  
 木こ立たちはきき研けんあれば二寸すんさたも見けしと藻屑も三さん平へい土つ子こ泥ど助すけ馬うまの  
 脚あし音ねと心あてに前後ぜんごようきらつつる小目めあてらひ思おもひを両りやう人にん同どう士し  
 打うち不ふ丁ていと打合あと劍下げときらぬけく三さん郎ら丸まる衛ゑ門もんをひぎらり小きる  
 刀や大だい上じやう雁げんハが鼻はなのさたにまうるれば胸ひりとてのけをうらう。伴た左さ衛ゑ門もん  
 心こゝろ中ちゆう不ふけし時ときをこさぶりら恨うらみをもこえと思おもひはけ息をとしてうらぬ。三さん平へい  
 泥ど助すけ雁げんハが等らもあらうと揮つてままらう或あるへ互不ふ同どう士し打うちと薄手うすとあひ  
 或あるへ木立たち小きうつけく氣とうらう。三さん郎ら丸まる衛ゑ門もん今いま亦また不ふせまらう大だいをと  
 かくらる身みあれば好て戦心せんしんあく。早はやくけ場ばとのれをやく棄すんせけばも

四よ人にんの者不ふかとまれてせんとさらう。うみひをあてまらうつつる刀。三さん平へいが  
 片かた耳みみととき。二の太刀たう不ふ雁げんハが小こ指さしときらう落おちくるれば両人りやう心しん臆おそくて  
 ちとうくととあらうとさて泥ど助すけがさらうらうる刀はきらうた。三郎ら丸まる衛ゑ門もんが  
 刀や小こ丁ていと打合あたひふらとそと思ひはけ。丁とらんと打うち合あたひ伴た左さ衛ゑ門もん  
 その大刀たう音ねと心あてに抜足ぬきあしとて。北きた月づき後ごう勢とみて切つつる刀。あや  
 まらうと。三さん郎ら丸まる衛ゑ門もんが肩尖せん七しち八はち寸すん切きらうぬ痛半はん小こ屈くつせぬ強かうきき  
 のともろととを老人らうじんあればたらくとうらうく不死ふし伴た左さ衛ゑ門もん。たらみあけく  
 丸まるに丸腹はらを汚く切らうるれば三郎ら丸まる衛ゑ門もんを一色いしき呼よぶといふらう  
 屍しかばね居い不ふ嚏てんとたれらう。伴丸まる衛ゑ門もん揮ひつつみと結むすぶといふらう  
 伴た左さ衛ゑ門もん重ちゆう勝しやうあらう。小山こやま三さん郎ら丸まる衛ゑ門もん汝な君きみ今いまといふらうと我われと辱らう  
 小この眼骨がん髓ずいふととて忘わすれがらう。今いま其その仇あだを報るといふらう。懐なつ中ちゆうといふらう。





物小包一草履のかたしと取出しこれ先年汝を辱めたる上草履あり。膽王小こころよとひつ。連打ふ打けるを三郎左衛門苦いけ息とつき。油等ハ過切盗賊と思ひつるふ。さて人たぐせいか。伴九郎門等二月ふおろきなり。三郎九郎門刀はさうて立上り。兒子に仇とむらふよもせよ。たま打ら此奥か奴我年と老れ名ふ合の勝負あり。汝等ごとの鼠輩とも数人来るとも物の数とわりの暗打ふせしむると。武運ふつきたる身のもてよ。死る命の押かす福。唯心残りハ二方ハ安不口をばで相果るう。さよとひつ。よろびひまると伴九郎門をばし。合破と蹴倒し。山三郎と思ひの外。運のそたるおひなれ。山三

あぬい疎念ふれ。汝を打しも又此方不幸とするこもあり。同話のさく死ぬじとや。さげふ言つ。あつ切ふさり。三平。泥助雁八等も。三郎九郎門の苦痛の色とちふ立上りて。すく小斬つけ。贈れや。おぞなかりける。折しもさぐの鐘打交て。諸行無常と告げ。小田の蛙の鳴らして。いゝ家とさふり。僕鹿藏ハ先程より。笹野蟹藏と海合。深田の中ふ踏むて。たひよ呼吸の息をこ心めて。小戦双方薄手とおひり。鹿藏三郎九郎門と伴九郎門つ。つひの詞を遙くさけけ。扱ハ彼奴遺恨みより。人たぐへて。や御主人と手よかけ。か仰天。蟹藏と捨て。主人の色をる方。探りゆんとする。三平雁八らとま。とま。二人ひくく切けたり。麻糸を丁とけり。又もゆん。たる時。雨雲をれて二輪の

明月皎くとかく申した木乃間とりてまうあきうらうらひの鹿  
 五人の衆を見らふ伴なあつをまら四人の者皆見たりたるかの  
 ともなり五人の者も鹿をのりて見たり下部の生おき後日  
 乃さあげなり。一同ふさまたてまうた揃て切つ。勢猛鹿も  
 双拳四手ふ敵一がく。わどく危く見らる。三郎左衛門が  
 馬一色いそえて荒走。五人の者と踏たう。踢たうけけり。鹿  
 五人の者の大に狼狽。まうたかきてをいへたり。鹿大けり  
 まう。今度躍りふ刀とまう。四面八方とまう。五人の者一方荒馬ふ  
 踢たうけり一方鹿が死物狂ふまうたて。つふ敵とる。まう  
 つど。いらあー出いて逃い。や鹿主人の敵のまじやとよづりつ。  
 韋駄天走りふ追行り。折る折るもひふの方より。黒星眼平。五十

人の荒男とひと。貝。高挑灯と前なて。行列とつ。林。あき  
 松ひて足ぐや不そみ。来る鹿をこれと見。正是上館の打手  
 ろん。立取りて註進。彼等追て仇を報ん。心ハ二ツ  
 身ハ一ツ。おいて思案。わうて。躊躇。か。所をわ。か  
 わうらひぬ。ぬ黒星眼平。時刻とら。平群の下館。おせし。ひ  
 これハ大殿の教令とら。銀杏前。の月若。の親子の。首を  
 たまらんぬ。ひ。なる。名古屋父子。わうて。あ。二方。とら。と  
 べし。志。た。う。う。け。れ。は。一。大。事。と。第。中。大。本。騷。動。各。古。屋  
 山三郎。走出。其儀。刻。尚。館。お。告。る。者。あ。ふ。り。父。三。郎。左。衛。門  
 御助。今。と。願。ん。な。り。先。刻。上。館。へ。ま。う。紙。一。張。父。が。飯。の。ひ。ま。う。で。  
 志。ま。う。く。程。遠。く。ま。う。べし。と。ら。や。も。果。ど。い。か。く。教。令。ら。れ。ハ。片。時。も

新古今屋巻之三

七五



古田屋

五



古田屋

五

待こと柳うらぐ。若徒は月おちる。某奥へ踏込て所首打べ。返答  
いふとつふ山三郎あるうへは是氷よおちる。某命やんかまきり。の  
御二方と後とこと。まうるうらぐとつひはくたや身支交して。ことごと  
いで斬死をべき勢あり。眼平あざく笑大殿の押人せ紙背く不忠  
者先彼を打取と下知。それバ大勢一ふお乱入。山三郎ととり  
かみ。火花とらして戦う。さうら多勢山三郎へを一人とととも。  
忠義とるとた太刀さき小斬まうれ。をさうらふらむて大庭までさうと  
ひ。其ひぬ小山三郎奥の殿よとせまのり。姫君若君よひひ父が  
吉左右けたぬるまぐ。一旦詰をゆたらぬき東れうとつひふらぐ。  
月若の乳母柏木らる者女うらむもわじどきりのあて。毒ハ若君とあがり  
ておちゆべ。山三郎の姫君と守護してゆたらぬのたぬれかしてつて

かしく身支度。若君とせまひ長刀ハ小服ふらむて。後門も露  
行ぬ山三郎へ姫君と押ひまゆせ。つてのぬれぬとたう。あや  
後門も打手のつひのまきうてさうら山三郎とやりぬく。と  
よづりつ多勢のうらみきりひたて。生駒山のかさぞおちりゆきけり  
道犬が奸計の子細とたがぬ。偽筆の達人をたの。銀杏前の  
手跡と見せて偽願書とかしら味つらむとて。おちて庭中よ埋り  
おちけりまきり

山三郎姫よせおちておちらゆ生駒山の林鹿の辻堂ふおちて。危難！  
あふと。つぎの巻と讀得てまぐ

卷之二終

古今屋巻三



